

中国で制作し、中国で発信する

—南京在住のドキュメンタリー監督竹内亮氏に聞く

竹内 亮 （ドキュメンタリー監督）

インタビューア—

砂山 幸雄 （愛知大学現代中国学部教授）

解題

二〇二〇年一月に武漢で爆発的に感染が拡大した中国では、政府が全面的な感染防止策を展開して、他国に先んじてウイルスの封じ込めに成功した。在住する南京におけるその対策の徹底ぶりを伝えた竹内亮監督のドキュメンタリー『新規感染者ゼロの街』は日本のテレビでも紹介され、竹内監督の名は日本でも一躍知られることになった。

竹内監督は一九七八年千葉県生まれ。

日本でテレビのドキュメンタリー作品の制作に携わったのち、二〇一三年に南京出身の夫人とともに南京に移住、「南京和之夢文化伝播有限公司」を創立してオンラインで配信する映像制作を開始した（和之夢の音「和之夢公式チャンネル YouTube 配信」）。インタビューでも言及される短編の『私ここに住む理由』シリーズは日本に住む中国人、中国に住む日本人を取り上げ、て長期にわたり人気を博しているほか、

ロックダウン解除後の武漢市民の心情に迫った『お久しぶりです、武漢』（二〇二〇年）、貧困脱出が喧伝される少数民族の村を取材した『大涼山』（二〇二一年）は中国内外で注目された。

※本インタビューは二〇二一年八月に蘇州滞在中の竹内監督とオンラインで結んで行われた。インタビュー中に「編集部」とあるのは大部分が編集委員の高明潔による発言だが、一部はインタビューの実現に関わった愛知大学関係者の発言である。

（高明潔）

◆中国に渡った経緯

砂山 竹内監督は現在、南京を拠点にネット動画を制作されていますが、南京の徹底したコロナ対策を紹介した動画やロックダウン解除後の武漢市民を取材した動画などが紹介されて、日本でもよく知られるようになりました。しかし、恐らく中国では今一番知られている日本人の一人ではないかと思えます。まず、竹内さんが中国でネット動画を始められた経緯や動機について簡単に説明いただけますか。竹内さんは日本でテレビのドキュメンタリー制作に携わって、そこから中国で「オウンドメディア」(owned media)、中国語では「自媒体」と呼ばれる領域で活動を始められたのですよね。竹内 そうですね、ざっくり話すと二〇一〇年から二〇一一年にかけて私はNHKで長江のドキュメンタリーを撮ったんですね。『長江―天と地の大紀行』というタイトルで、長江の源流から六三〇〇キロ、上海に至るまですべて記録しまし

た。その当時はすでに中国人の妻と日本で知り合って結婚していましたが、中国語はできませんでした。中国に対する理解もそこまで深くはありませんでしたが、中国関連の番組をよく作りました。NHKの『世界遺産』の制作中、出張の取材でよく中国に行くようになりました。二〇一〇年当時に感じたのが「この人たち全然日本のこと知らないな」ということでした。特に内陸の方の人たちと会うと大体言われるのが、「高倉健は元氣か」と「山口百恵は元氣か」。もっと酷いのは「日本鬼子」が来たぞ」とか、そういう感じで、全く現代日本を知らない。二〇一〇年もう二一世紀に入って、もう「微博」とかSNSが出てきた時代ですよ。なのに、全く知らないことになり衝撃を受けまして、これはちよつと中国人に向けて日本の現代文化を紹介する番組を作りたいという欲求が出てきたんですね。それにはやはり視聴者の近くに行かないといけない。日本ではそんなものは作れないので、それで中国に行きたいという思いが強くなり、当時

は、中国語があまりできなかったのですが、中国をもっと知りたいから、中国語を勉強したくなった、これも要因ですね。

ざっくり言うとなつて三つです。「日本の文化を中国人に伝えたい」「中国語を勉強したい」「今の中国をもっと知りたい」この三つの理由で中国に行こうと決めました。もつと個人的なことを言うと、日本では結構大きな番組を作っていたので、これ以上あまり発展がなく、今後一〇年二〇年経つても、これ以上大きい番組はないだろうと、同じことをやっても面白くないなといった、そういう個人的な考えもありました。これらの背景から、なんか新しいところで挑戦してみたいと、当時三三歳ぐらいだったので、挑戦するなら若いうちの方がいいかなと思つて決めました。この思いは当時、奥さんには反対されたんですけど。

◆制作を始めた頃

砂山 そうすると、最初から中国人を対象とした番組の制作をお考えだったんで



竹内 亮[Takeuchi Ryo]

竹内監督作品の多くは、YouTubeで観ることができる。YouTubeにはショート動画「竹内亮の中国ここの話」が不定期で公開されている。また、初の著書として『架橋—中国を第二の故郷にした日本人』（KADOKAWA、2022年3月）が刊行された。

すね。メディアとしては、最初は中国のテレビ局をお考えだったのですか。

竹内 最初はやはり僕がテレビ出身なので、ネット動画も出ていたんですけど、まだまだレベルが低いものばかりで、正直馬鹿にしてたんです。テレビのほうが上だよみたいな、勝手に考えていて。中国のテレビ局も回って、「こんな日本の文化を紹介したい」「日本の文化を紹介する番組を作りたい」とか相談したんですけど、当時ちょうど尖閣諸島問題をめぐって両国関係が緊迫していた時期で、中国のテレビ局からは無理だと全部断られました。「中国のテレビ局で日本の文化を大々的にPRするのは無理だよ」と言われて、途方に暮れました。二〇一三年に中国に引越してから、二〇一五年にかけてずっと途方に暮れていたんです。当然お金を稼がないといけないので、引き続き中国に住みながら日本の番組を作っていました。

砂山 日本人向けの番組ですね。

竹内 日本人向けです。今までと同じことをやっただけです。せっかく中国へ引つ

越して来たのに、同じことをやってしまった。このままでいいのかなと思っていました。そのままでいいのかなと思っていました。二〇一五年にたまたま友人がネット動画を始めて、それがすごく流行していることが分かって、これはすごいなと思った。それまでネット動画を馬鹿にしていたんですけど、二〇一五年はネット動画が発展し始めた時期にあたっていたんですね。ネット動画はすごく影響力があることを目の当たりにして、それで俺もやってみよう。どうせテレビ局も相手にしてくれないし、だからやるしかない反面もあったんですけどね。わざわざネット動画をやるうとして始めたわけではなくて、他の道がなかったからそれしかない。幸い、始めて規制も緩かったもので、日本の文化を紹介しても何の問題もないし、文句も言われなかったですよ。

砂山 その頃は自分で作って、勝手に「微博」とかに載せてよかったのですか。

竹内 そうです。今は無数の動画配信サイトがありますが、当時は「優酷」「爱奇艺」「騰訊」の三つほどしかなく

て、作った『我住在這里的理由』（私がここに住む理由）をその三つに勝手にアップしました。幸いなことに、すぐに「優酷」の編集者の目に留まったんですね。当初は我々みたいなプロがネット動画に参入した例がなかったたので、プロの目から作品を見ると、すぐにこれは明らかにプロが作っているものだと分かるように、「優酷」とか「愛奇芸」の編集者たちからすぐに連絡が来て、一緒にやろうと勧められました。初期の段階からかなりのトップページにも無料で推薦してもらいました。最初はかなり推してもらったので、早く再生回数が伸び始めました。タイミングが良かったです。

砂山 二〇一四年に「和之夢」を設立されてすぐ作品が載ったわけですね。中国は変化がすごく速いので、五年、六年は普通に考えれば短いですけど、変化の速さを考えると短いとは言えないかもしれません。竹内さんから見て、この間の活動の状況は、初めの頃には想像できなかったのではないのでしょうか。竹内 おっしゃるとおりです。当然予測



『私がここに住む理由』撮影時に京都にて（2021年6月）

もできなかったし、こんなにネット動画が中国を席卷するとは思いませんでした。始まったばかりの時はまだまだテレビのほうが強くて、ネット動画の立ち位置は下だったんですけど、今はひっくり返って、誰もテレビを見なくなりまして。ネット動画と一口で言っても、ネット動画自体もどんどん変化してきました。中国では、最初は「優酷」「愛奇芸」

「騰訊」の三つだったんですが、そこから「bilibili」というのが出てきて、どんどん新しいのが増えてきました。一気に流行り始めてお金と人材がネット動画に集まり始めて、今度はライブ配信が流行り始めたんですよ。

生放送は中国語で「直播」と呼ばれ、「直播」が二〇一六、一七年から流行り始めて、一気にサイトも増えて、「直播」もやっているし、ネット動画もやっています。二〇一八年ぐらいから、「抖音」（中国版「TikTok」）が流行り始めて、動画も一気に短くなりました。一分とか二分しかないですね。二〇一九年あたりからは、中国のテレビ局もネット動画と組み始めて、中国のテレビ局で制作した番組を先にネットで配信するようになったんです。もう誰もテレビを見ないから、中国のテレビ局は今や制作会社として活動していると言ってもいいくらいです。国営や公営テレビ局は配信者としての力は次第に弱くなりつつありますが、制作の能力は残したままなので、テレビ局自身が制作したものは一応自分たちの

テレビ局で配信するんですけど、視聴者が少ないので、制作した内容はネットのプラットフォームと組んでそちらで配信しています。どんどん変わってくるので驚きですよ。中国から見ると日本のテレビはまだ全然変わってない。

◆日本との違い

砂山 日本のテレビは変わっていないというのですが、中国とは何が違うのでしょうか。日本からだとも中国はいろいろと規制が多くて活動しにくいように見えるのですが、インターネットの隆盛というのは、今おっしゃったようにテレビを押しつけて、視聴者を奪ったわけですね。その原動力はどこにあるのでしょうか。

竹内 いろんな要因があると思いますが、一つ目はまず若い。中国ではこの業界全体がすごく若くて、僕がいろいろなプラットフォームの偉い人との打ち合わせに行くと、みな僕より年下ですよ。僕は今、四一歳ですけど、そのトップの人

でも若いんです。すごい頭が柔らかくて決断も早いし、どんどん変えていきます。

二〇代、三〇代の人たちがメインになっている。一方で、日本のテレビ局はもう六〇代の人たちがいまだにその実権をずっと握っているから、変わるスピードが、動きが鈍い。やはりネットをなかなか理解できないから、上層部の年齢の違いがかなり大きな要因の一つかなと。

また、社会全体が発展途上国の利点だと思いますけど、みなスマホでプラットフォームに配信される動画を受信しています。テレビ番組を見るというのは面倒くさいし、ネット動画ならすぐ開いて見られるので、今の中国人の生活スタイルに圧倒的に合っています。わざわざテレビを買って家に置いて、家でゆっくり見る生活スタイルなどは全くないでしょう。これがメインの生活スタイルになっているので、これは二つ目の要因だと思います。

砂山 日本でも若者のテレビ離れが言われていますが、日本の若者はそこまでネット動画ばかり見ているでしょうか。

ネット映画とかは見ていると思いますけど。

竹内 そうですね、日本の若者もほとんどテレビを見なくなってきた、YouTubeばかり見ているという状態に変わってきているようですけど、それでもやはり日本ではテレビは強いので、中国と比べると日本ではまだまだだと思います。

制作体系も大きく違って、日本の場合はテレビ局があつて、その下にたくさん下請けの制作会社があるという構造があり、これは全く変わりません。しかし、中国ではそれがもう全部変わって、我々みたいなオウンド・メディアがものすごくたくさんある。制作も配信も企画も全部自分たちでやる、スポンサーも自分たちで集める。要するに小さいテレビ局みたいなものです。プラットフォームはあくまで配信する場に過ぎない。プラットフォームからお金が降りてきてやることもあるにはありますが、上と下の系列関係は全然ないのです。ファンを持っている我々みたいなオウンド・メディアの方が強いんです。そういう意味で、制作

体系の構造自体が完全に変わりました。

砂山 日本のテレビ局では斬新な企画を立てても、なかなか通らないケースが多いのではないかなと思いますが、中国では、例えば竹内さんの新しい企画に対してすぐスポンサーがつくのですか。

竹内 そうです。自分たちがやりたいと言って、お金さえ集めてくればすぐできるのです、こちらの方が新しいものが生まれやすい。日本の場合はテレビ局の何人かのプロデューサーが全てを握っていて、彼らの御眼鏡にかなわないものは何も通らないので、発展するはずがありません。中国の場合、我々みたいなオランダ・メディアが日々競い合って、より新しいもの、より刺激のあるもの、より面白いものを作り続けていく。そこが全然違います。

◆問題は規制より資金

砂山 制作面は分かりました。発信する際になにか規制などはありますか。

竹内 一応、各プラットフォームに検査

部隊のような機能があって、動画をアップすると見られています。ただ、そんなにじっくり見ているわけではないように、一応見てOKしたら、アップされるという流れです。だから、大手プラットフォームにはものすごい数の検査部隊が

いますが、「微博」とかにはたぶんいません。誰でも好きにアップできて、もし問題がある場合には後から削除されません。だから、私が武漢の作品『好久不見、武漢』（お久しぶりです、武漢）を作ったときに日本のファンや日本のネット民から、中国が検閲した後の作品だから、中国政府が絶対に介入したとか、いろいろ書かれましたが、実際はなんにもありませんでした。企画から、撮影、編集、配信、その後にいたるまで、中国政府が我々に干渉したことは一回もありませんでした。

砂山 そうですか。中国外務省の華春瑩報道官が『後疫情時代』（アフターコロナ時代）を、ありのままの様子を伝えており、高く評価すると発言していましたね。

竹内 どちらにしろ、中国政府が途中で

介入することは、本当に一回もありませんでした。日本のネット民たちは好き勝手に言っているなと思いますけど。

砂山 これまで「自媒体」を運営してこられて、なにか特に苦労したことはありますか。制作面でもその他の面でもいいです。

竹内 やはりお金です。スポンサーが見つからないと続けられませんが、ファンがたくさんいないとスポンサーも獲得できません。始めた当時はファンの数もなかなか伸びず、スポンサーもそれほどつかなくて、最初の三年間はきつかったです。我々が最初の三年間で作ったドキュメンタリーの『我住在這里的理由』（私がここに住む理由）では、日本に住んでいる中国人、中国に住む日本人を主に取り上げたんですが、見る人の幅は狭くて、日本好きしか見ないです。どんなに頑張ってもファンはそれほど伸びません。日本好きの人々の間でしか知られませんでした。それが一気に伸び始めたのは、去年コロナの作品を作ったからです。あれは日本とか何も関係がないの



『お久しぶりで、武漢』の撮影時に(2020年6月)

で、中国国内の視聴者の幅が一気に広がりました。

砂山 『東游食記』や『速食物語』も日本のものですよ。これらはあまり伸びなかったのでしょうか。特定のファンはいたのではないかと思います。

竹内 完全に日本ものです。『東游食記』も『速食物語』も作品としてはけっこう自信を持っていて、見れば面白いと思います。しかし、『速食物語』に出演しているMCは速水もこみちさんですけど、中国人は誰も速水もこみちさんを知らない。なので、結局それほど一気に人気が発散することはなく、好きな人が見る程度に留まっています。

◆ ヒット作の出現

砂山 新型コロナ関係では、南京のコロナ対策の動画が日本で評判になりましたが、あれは中国人にとっても新しい情報になったのでしょうか。

竹内 日本語では『新規感染者ゼロの街』というタイトルでしたが、もともと

は完全に日本人向けに作りました。ところがスタッフに見せたら、「この内容だったら中国人もみんな知らないよ」と言うので、ついでに中国でも流そうかと、そんな感じで流したんです。そうしたら視聴者が予想以上に伸びるようになって、そこから変わりました。

砂山 お金が集められるようになったのはその辺りからですか。

竹内 そんなにすぐというわけではありません。中国ではコロナが爆発中で、社会全体も会社も大変だったので、そんなにすぐではありませんでしたが、去年(二〇二〇年)の夏ごろからすごく視聴者が増えるようになりました。

編集部 竹内監督が制作された『大凉山』(原題『走近大凉山』)はとても印象深いものでした。私の学生の中には中国の少数民族に関心を持つ学生が多いのですが、大凉山のような奥地に行ける機会はありません。このドキュメンタリーを私の授業で学生に見せました。学生はみな感動していました。私自身、以前雲南省のイ族地域で貧困調査をした

ことがあるのですが、『大涼山』では、変わりつつあるイ族地域の現状がよく分かってきました。監督ご自身が、この作品を制作する過程で感じられたことをお聞きしたいです。

竹内『大涼山』は想像もしてなかったぐらいヒットしました。正直のところ、そんなにヒットしないだろうと思っただけです、地味な話だから。ところが日本でも中国でも、YouTubeでもネットサイトでもかなり大ヒットしました。なぜだか、いまだによく分かりません。少数民族に関しては、二〇一〇年に撮影した『長江』の番組で、青海、四川、雲南などの少数民族地域をずっと回って撮影したので、ある程度は分かれます。大涼山も二〇一〇年に行ったことがありますが、去年二〇二〇年うちの会社のカメラマンが、番組にも出ていますが、大涼山でボランティアをされていて、ずっと大涼山を撮りたいと私に言い続けていたの、ちょうど十年たったし、行ってみようと軽い気持ちで行きました。ですから、この作品はカメラマンの願いを叶え

るために制作したというのが実情です。

十年前の大涼山は中国最貧困地域で、道路もないし、当時はロバに乗って山村に入りました。村は本当に貧しくて何もなかったですよ。それがどう変わったのか見てみたいとも思いました。十年ぶりに行ってみたら、道はちゃんと舗装されているし、地元の政府が提供する「安置房」（政府の計画に基づき移転を求められた住民に無償で提供される集合住宅）もいっぱいあるし、十年前と風景が全然違っていました。しかし、ここから本当に貧困脱却できるのかというと、まだまだ分からないというのが正直なところです。家と道路があっても、そんなにすぐ貧困脱却できるほど簡単なものではないからです。全体的に教育のレベルがまだまだ低く、若い人はみな都会へ行ってしまっているので、小学校ではボランティアで教える先生がいないと、教育環境にも限界があるように感じました。しかも、先生たちはあくまでもボランティアだから、

最長で一年しかいられません。教育レベルの大きな格差をどうするか、今後一

番大事なことだと思います。

編集部 貧困脱却は総合的な政策や措置を講じる必要があるということですね。

砂山『大涼山』について、もう少しお聞きしたいと思います。この作品は中国でどうしてそれほど多くの視聴者を獲得できたのでしょうか。少数民族の貧困地帯の実情を知らなかったからでしょうか。竹内 いや、知ってはいったんですよ。中国全体で「脱貧」が解決すべき課題でしたし、去年はコロナ対策以外の大きな課題はやはり「脱貧」だったので、ニュースでは頻繁に「脱貧」と言っていましたものの、実際どうなったのか、みんなそんなに興味もないし、あまり見たいと思ってもいいない。たまたま、僕らの手法が、CC TVなどがやるような貧困で苦労している頑張っている人たちが貧困から脱却する物語を描く、ということではなくて、「遊びに行くぐらいの感覚で見に行こう」という感覚を大事にしたんです。普段それほど興味がない人たちでも、我々が作ったものを見て「面白いなこれ」「遊びに行ってみたいな」ぐらいの



四川省凉山彝族自治州
布拖県海特苦村にて
(2020年7月)

が良かったんじゃないかと思えます。
砂山 ボランティアの若い先生が登場しますが、都会から貧困地域へ行くボランティアたちの姿は中国ではあまり紹介されていませんか。

竹内 紹介されてはいますが、結局みんな見ないんです。僕が申し訳ないと思うのは、貧困地域に根を下ろしてずっとドキュメンタリーを撮っている人はいっぱいいるんです。一年間、三年間、五年間も密着して撮っている。僕らは一〇日間ぐらいしか撮っていません。全然軽いですよ。だけど、ネットに流れる作品の中で、実際に見られた数としては僕らが作ったのが一番多いんです。申し訳ないなど思うとともに、貧困を紹介して、スナップみんな苦労しています、ボランティアたちが頑張っていますというような堅すぎる作品は、今の若い人たちは見たいとは思わないのです。NHKをさらに堅くしたようなドキュメンタリーばかりなので、若い人たちは見たいと思わないですよ。そこで、僕らはなるべくエンターテインメントを取り上げよう、とい

うことをやりました。

◆「堅い」ドキュメンタリーとの違い

砂山 その堅いドキュメンタリーとは、いわゆるインディペンデントのドキュメンタリー監督たち、王兵とか呉文光とか朱日坤とかの作品のことでしょうか。私も少し見たことがあります、何時間もあるような大長編もあって、リアリティを感じさせるものが多いです。そういうドキュメンタリーのことでしょうか。

竹内 僕が言ったのはCCTVのドキュメンタリーです。もちろんインディペンデント系のものも含まれますが、特にCCTVのドキュメンタリーはみな見ないですね。堅すぎるし、宣伝色も強すぎ、あることはあるけど、見ないというのが現状です。

砂山 同じ「脱貧」の現場を扱ったもので、青海省の回族地区で村ごと町に移住する様子を描いた二時間ほどのドキュメンタリー番組を、NHKが数年前に制作、放送したことがあります。移住する

ためには一戸当たり三万円ぐらいの自己負担が必要だけれど、その工面がなかなかできない家庭とか、都会に行ってもすぐに仕事が見つからず決して生活を楽にしない家庭とか、貧困家庭の苦勞を描いていました。竹内さんの作品と比べると、大変なところを描いているのは同じですが、視点の置き所が違っていて面白いなと思いました。学生には両方見てもらいたいですね。昔の『激流中国』シリーズに代表されると思いますが、日本では中国が抱える困難な問題とか暗黒面を描いたドキュメンタリーがよく放送されますが、竹内監督はこの種の日本のドキュメンタリー作品をどのように見ますか。

竹内 僕は中国にいるのであまり見られません。僕が見たことのある範囲内です。と言うと、日本人の視点で見ると、それでいいんじゃないでしょうか。でも、真実から離れた部分は結構あります。やはり日本人が理解した範囲でしか描けていないのではないのでしょうか。結局プロデューサーが日本に住んでいる日本人



四川省涼山イ族自治州
布拖県俄里坪郷果木村にて
(2020年7月)

で、中国に来たこともない人たちが作ったものなので、現場に来たキャスターが多少分かったとしても、最終的に実権力を握っている人たちは中国を全く理解していないか、理解したような気持ちになっっている人たちがばかりなので、表面的だなと感じるものが多いですね。もちろんすぐリアルなものもありますけど、全体的にいうとご都合主義かなという感じはします。

ただ、日本人に見せるなら、それはそれで全然いいと思いますよ。そんなに深いものを作っても理解できないですしね。僕はあくまでも中国人に見せるために制作しているので、中国人がみな知っている情報はとぼします。NHKで放送する場合は、基本情報からちゃんと教えていかないと日本の視聴者は理解できないので、逆に基本情報を教えるために深い部分をカットすることもかなりあるでしょう。それは仕方ないと思います。どちらがいい、悪いじゃなくて、視聴者層が違うからそれはそれでいいかなと思います。

砂山 『大涼山』は日本人が見ても面白いと思います。日本のどこかの局で放送してもいいんじゃないかと思います。あの怖いハシゴ階段、結局竹内さんは上まで行かなかったですね。

竹内 行かなかったです、高所恐怖症なので（笑）。

砂山 あれを見たら、日本人はびつくりするでしょうね。あと、『お久しぶりです、武漢』は日本でも紹介されましたけれど、中国での視聴数はすごかったようです。それは中国人たちが武漢の実情を知らなかったからですか。

竹内 もちろんそれもあります。やはり新鮮だったんじゃないですか。武漢に關するドキュメンタリーは今回ものすごくたくさん作られましたけれど、僕らの作品がかなり当たったのは外国人の視点だったことが一番大きい理由ではないでしょうか。ほかの中国のドキュメンタリーは、大体英雄視して持ち上げるんですよ。あまりに持ち上げるのでリアルじゃないですね。僕はそういうのをやりたくなかったの、あくまでも武漢の普

通の人をありのまま撮って流せばいいんじゃないかと思いました。それが新鮮だったのでしょうか。僕もこんなにヒットするとは全く思っていませんでした。

砂山 日本のテレビ局で紹介されたのは一部だけでしたか。

竹内 一部だけです。当時、中国の映画ランキングで一位になりました。最初、一時間もあるこんな長いドキュメンタリーを誰が見るんだとスタッフに反対されたんです。だけど僕はせつかくこんないい素材が撮れたから、一〇分、二〇分にしてしまうのはあまりにももったいない、見る人が少なくともいいと腹をくくって一時間にしたんです。それがたまに成功してよかったです。

◆『私がここに住む理由』

砂山 竹内さんはずっと『私がここに住む理由』を作ってこられてきました。もう二〇〇作くらいですか。

竹内 三〇〇作くらいはいつているかな。もう自分でも分からないです。

編集部 そもそも『私がここに住む理由』のねらいは、中国の人たちに日本の様子を見せようということだったのでしょうか。

竹内 そうです。最初は日本の文化を紹介したかったので、在日中国人の目を通して日本を紹介するというコンセプトで、日本に住んでいる様々な職業の中国人を撮って、日本を紹介することをやっていました。そのうち単純にネタ切れになって、じゃあ逆をやってもいいんじゃないかと、中国に住んでいる日本人を取り上げたところ、すごく評判が良かったんです。それで少しずつ作り始めました。もともと今の中国人は日本のことを全然理解していないから、日本の文化を紹介する番組を作りたいと思って中国に来たんです。その後、日本人も今の中国を全然理解していないということに気づきました。それで、中国に住んでいる日本人の姿からよりリアルな中国を伝えることができるかなと思って、次第に中国に住んでいる日本人を取り上げるものが多くなってきました。もちろん中国

人に日本を伝えたいですけど、日本人にも中国を伝えたいし、今はコロナという現実的な理由もあって、最近では中国に住んでいる日本人ばかりになりました。砂山 最初の日本に住んでいる中国人を通して日本文化を紹介するという部分では、反響はいいがですか。中国人の目にはやはり新鮮だったんですか。

竹内 そうですね。こんなに近い国だけで全然違いますから。運が良いことに、私がこの番組を始めた二〇一五年に日本旅行ブームが始まったんです。「爆買い」という言葉が生まれたのがこの年ですよ。いろんな人が日本に旅行に行くようになって、行ったことあるからこそ日本をもっと見たい、日本に住んでいる中国人はどんな暮らしをしているのか見たい、そういう中国人がどんどん増えてきて、その波に乗って再生回数が増えました。運です。

砂山 いろいろラッキーだったわけですね。逆に中国に住んでいる日本人を描いた方ですが、これも主な視聴者は中国人ですよ。

竹内 主にはそうですね。今は日本人視聴者を増やそうとし始めました。今年に入って日本のファンを増やそうという会社全体の意識として、海外宣伝部というのを会社に作って、専門に当たる人を三人雇って日本への発信を強めています。それまではずっと中国人だけです。

砂山 私も日本人はもうちよつと中国の一般庶民の目線、あるいは中国に住んでいる日本人の目線で中国を知った方がいいのではないかと思えます。しかし同時に、中国に住んでいる日本人の視点というのを中国人がどう受け取るのかにも興味があります。日本人は日本に住んでいる外国人が日本について語る番組を結構喜んで見ていますよね。その中国版としてみると、中国に住んでいる日本人の話や生き方などを、中国人はどんなふう

に受け取っているのでしょうか。日本人も割といい奴だと思うんですかね。竹内 そうですね。それが一番大きいんじゃないですか。日本人は顔は同じだけど、自己主張が苦手なので、何を考えているのか分からない。日本人は表面では



四川省樂山市
金口河区関村壩站にて
(2020年7月)

笑顔で接してくるけど、実際何考えているのか分からないという中国人が多いので、僕らのレンズを通して日本人の考え方や見方を描くことで、「日本人ってこういう人なんだ」「ええ！ こういう考えなんだ」と新鮮に感じられるようです。砂山 中国に住んでいる日本人、あるいは日本に住んでいる中国人を紹介する中で、竹内さんが想定していなかった面白い反応などはありませんでした。

竹内 想定してなかったことは正直そんなにあります。僕は両方分かってるので、中国に住んでいる日本人のグループは当然僕自身もそうですから。彼らが何をしているのか、何を考えているのかは大体分かるし、日本に住んでいた時は、妻が中国人なので、いろんな中国人と交流していましたから、そこに関する新鮮味は特にありませんでした。

唯一面白いなと思ったのは、世代によって全然違うという点です。特に、在日中国人は六〇後（一九六〇年代生まれ）、七〇後、八〇後、九〇後、〇〇後で全く違います。彼らから中国社会の変

化を見ることができているのが面白いと思いました。五〇後、六〇後は、お金のために、日本に来ていられるんです。三〇年前ほど前ですね。七〇後、八〇後になると勉強のために来ている。日本の技術を学びたい、知識を学びたい。九〇後になると自分の夢のために来る。お金はあると、別にお金のために来ているわけじゃない。九〇後、〇〇後になるとアニメの監督になりたいとかアイドルになりたいとかそういう自分の夢のために来ているんですね。こんなふうに世代によって日本に来る理由が違うので、それは新しい発見だなと思いました。

砂山 なるほど。中国に行く日本人もだんだんと世代によって変わってきているかもしれないですね。竹内さんもなにかの夢の実現のために中国に来ているのではないですか。

竹内 そうですね。夢のためというところがですが、別にお金儲けのために中国に来たわけではないです。でも僕の感覚でいうと、中国に住んでいる日本人は世代によって全然違うということはあまり

ないです。やはり、失われたこの二〇年も含めて日本経済がそんなに変わっていないからではないですか。

砂山 変化はあまりないですからね。

竹内 全然変わらないですね。中国にいる理由に関しては、僕より上の人も、僕より下の人もあまり変わりません。

◆南京に住んでみて

編集部 少し話題を変えて、砂山先生と竹内監督の繋がりは「南京」にあるのではないかと思えます。砂山先生も南京大学に留学したことがあったそうですが、私はお二人とも日中関係の中で微妙な存在である南京に滞在したことに興味を持っています。砂山先生が南京大学に留学したのはいつ頃でしたか。

砂山 私は古いですよ。一九八二年九月から一年半ほどです。今とはまるで違う惑星に行ったみたいな感じですね。

竹内 改革開放まもない頃ですね。その時期の南京を見たいな。

砂山 私が留学した時、ちょうど最初の



四川省凉山彝族自治州布拖县采洛村にて
(2020年7月)

歴史教科書問題が起きて、日中関係が緊張していったから、南京に行くのはちょっと怖いと思いました。実際、南京大学のキャンパスに入ったら、キャンパスの通路に日中戦争の写真、南京大虐殺の写真がずらりと張ってありましたね。でも、一年半住んでいましたが、こういう歴史認識問題で中国人からお前日本人だからと言われたことはありませんでした。その後の様子はちょっと違うかもしれませんが、当時、南京だから日本に對

して特別厳しい見方を持っているという感覚はなかったですね。

竹内 何で南京を選んで留学したんですか。

砂山 中華民国南京政府時代の研究をしようと思っていたこともありましたが、それ以外に、南京のほうが北京よりも開かれていた印象があったことも理由の一つです。竹内さんは南京出身の女性と結婚され、実際に南京に住むようになってもう長いですよ。

竹内 南京に住んでもう八年ぐらいですけど、砂山さんがおっしゃるように嫌な思いをしたことは一回もないです。「お前日本人、嫌い」とか「過去を反省しろ」とかでいじめられたことは一回もない。

うちの息子はいま中学生で、普通の学校に通っていますけど、別に日本人だから、国籍が日本だからといって同級生にいじめられたことは一回もない。南京はもともと首都だったこともあって、外の文化に対して非常に開放的なんです。だけど、別の場所では「お前日本人、俺嫌い」とか、そういうのはありました。南京は本当にはいいです。逆に、南京の皆さんは私のことを知っているの、よく声をかけられますよ。

砂山 有名人ですからね。そういうことも含めて、日本人はあまり中国のことを知らないですね。お互いにもっと知ってもらおう努力が必要ではないかと思いません。

◆日中間の相互誤解

編集部 竹内監督にお聞きしたいのですが、日本人の中国社会あるいは中国人に対する誤解の中で最も大きな誤解は何でしょうか。

竹内 たくさんありますが、一番の誤解は、一切の自由がなくて、独裁政權で、中国の庶民たちはみな支配されて生きているみたい、というものかな。全然違います。僕は日本より中国の方が自由だと思っていますので、一切の自由がなく、すべて管理され、かわいそうな人たちというイメージは全く違うと思います。

編集部 逆に、中国人の日本社会、日本人への誤解にはどのようなものがありますか。

竹内 日本人はみな歴史を知らないとか、謝らないとかいまだにずっとと言っているのですが、日本人は中国を侵略した歴史も知らない、反省の気持ちもないと思っ

ている中国人も結構多いです。実際、歴史を知らない、反省しない人もいるけど、そうじゃない人もいっぱいいるんだよということを知ってほしいなと思います。

砂山 中国が共産党になにからなにまで完全に統制されているというイメージは確かに誤解を生むでしょうね。先程のメディアの話をお聞きすると、むしろ激しく競争するだけの余地があるというのが分かります。ところで、お互いの誤解を解くため、お互いの相互理解を促進するために一番必要なのは何だと思えますか。

竹内 僕はやはり人的交流しかないと思います。日中間がギスギスするのは、ネットでの情報のやり取りで誤解が生まれて、ネットで見た情報だけで腹を立て、携帯を使って怒り合っているという面が強いです。結局、直接対面できないことがそのような誤解を生む最大の理由ですから、早くコロナが終わってほしいです。いろいろな日本人が中国に来ることが大事だと思います。逆もそうですけど、今はコロナで仕方がないので、我々みたいなものが作るドキュメンタリーの

存在価値が試されている。ネットの偏った情報の影響力があまりにも強くなってしまつて、自分の見たい情報、自分の思想に近い情報しか見ないので、客観的に描くドキュメンタリーこそが大事だなと自分でもいま感じています。

砂山 竹内さんも発信はネット上だから、ネット上で作品に対して批判されたりすることはあるでしょう。

竹内 いっぱいあります。日本人のネットウヨからは、お前は中国政府から金を貰っているスパイだと、また中国人のネットウヨからは、お前は日本政府から金を貰っているスパイだと言われて、僕はダブルスパイになっています。でも全然気にしません。

◆中国のメディア状況

砂山 むしろコロナ禍でこそ存在価値が高まるという感じですよ。竹内さんから見ると、日本のメディアに対して、あるいは「自媒体」を含む中国のメディアに対して、要望、要求があったら教えてい

ただきたいです。いまの中国のメディアの状況をどういうふうにお考えですか。割とよい状態にあるとお考えですか。

竹内 いやいや、全然そうは思いません。やはりちょっと厳しくなってきました。コロナになってから、中国だけでなく全世界で極端な排外主義、極端な愛国主義に走る人が多くなってきたので、僕がちよっと日本を褒めたりするとすぐバッシングされます。それはやはり、やりづらいです。

砂山 その傾向は強くなってきていると感じますか。

竹内 確実に強まっています。この前のオリンピックでも卓球男女混合ダブルスで日本が金メダルを取った時に、中国のネット民たちはすぐバッシングしたんです。

砂山 ボールに息を吹きかけたとか、テールを拭いたとか……。

竹内 そうそう。日本のネトウヨも、会場で中国人集団がすぐ中国チームを応援していたとか批判して、お互いを非難し合っていました。国際交流の試合なの

に、なんでこんなことになっているんだと思いました。とにかく、今はほとんど日本関連の題材を扱いづらくなっています。政府が制限しているというより、ネット民たちが僕らに制限をかけているんです。ちよっとでも日本OKみたいなことを言うともものすごく批判され、消えていく人たちも結構いるので、それはやはり怖いんです。

砂山 それはやりづらいですね。

竹内 僕らが中国企業と組んで作品を作っている時も、中国企業はそこを非常に心配しています。こういう表現はちよっと日本を褒めすぎじゃないかと。そこは難しいです。よい状態にあるとは全く思わないです。

◆日本のメディアに望むこと

砂山 日本のメディアはどうですか。先程、日本のメディアについてもお話をうかがいましたが、こうしたら日本のメディアもよくなるとかありますか。

竹内 そんな偉そうなことは言えません

が、簡単に言うと、日本のメディアはもつともつとネットと融合すべきではないでしょうか。

砂山 なるほど。それ以外に、技術的にはどうですか。例えばドキュメンタリーの技術という点ではいかがですか。

竹内 それは日本の方が断然遅れていますよ。僕が今日本に帰っても通用するくらい全く進化していません。僕は中国に住んで九年になりますが、もし僕が中国を九年離れたらもうだめです。もうついでいけません。だけど日本は全然変わっていないので、九年離れて日本に帰っても、技術的には全然通用すると思います。日本は正直それぐらい止まっています。

砂山 そうですか。

竹内 中国を報道する仕方というと、あまりにも勉強不足だし、あまりにも結論ありきで中国バッシングしているのが多すぎます。もうちよっと考えて作ってほしいと思います。自分たちが毎日中国バッシングしていることが何を引き起こしているか、たぶん想像していかないのではないですか。中国を叩けば目先の視聴



『我是書城』の撮影 深圳にて
(2021年11月)

率は取れるのでしょうか、それが何を引き起こしているかというと、中国にいるNHK中国支局、日テレ、フジテレビ中国支局の人たちが全然取材ができなくなっているんです。もう中国の人たちはみな日本のテレビ局は常にパッシングしているのを知っているから、取材を受けません。自分が何を言ってもどうせパッシングに使うんだらうと。それで何が起きるかという、どんどん正しい中国の情報が伝わらなくなってしまっているんです。誰も日本の取材なんか受けたくないから。

砂山 そういう状況ですか。市民が日頃抱いている様々な不満を記者に話すと、それが日本では中国パッシングに利用されるので話したがらなくなるといわけですね。

竹内 それはすごく問題だと思います。砂山 日本の現地特派員たちはそういう状況をどう考えているのでしょうか。竹内さんにお尋ねすることじゃないですけど。

竹内 しょうがないって感じですか。何人

か友達がいますが、みな断られて全然取材ができないと、本当にため息をついています。だからいつも日本企業の取材ばかりしている。

砂山 身内しか取材しないってことですね。竹内さんも日本のテレビ局や新聞社から取材受けることもあるでしょう。

竹内 ありますよ。

砂山 その時はこういう話してくれと誘導されたり、逆にしゃべったことが載せてもらえなかったりということはあるのでしょうか。

竹内 そんなにないですけど、僕が日本のメディア批判をずっとしていることは、あまり載らないです。ちよつとは載りますけど、ほとんど全部カットです。しょうがないです。それはそうでしょう。

◆日本からの反響

砂山 話が前後しますが、竹内さんは中国の新型コロナ対策を日本にいろいろ紹介されましたが、それに対する日本側からの反応はどうでしたか。

竹内 日本も中国みたいにやるべきだという人もいるし、逆にこれは独裁国家だからできるんだという人もいて、千差万別です。初めのころ南京の感染症対策を扱った番組を作ったなかで、行動履歴を把握するQRコードを紹介しましたが、これは独裁国家だからやっていることだと当時は言われました。だけど、今は世界中でやっているじゃないですか。日本だってやっているじゃないですか。でも中国がやると、なぜかすぐに独裁に結び付けられて批判されるんですよ。同じことをやっても、ほかの国がやると、これは素晴らしいと見なされるようになっていきます。それがどうしても納得できないと感じます。

最近日本に帰った時に、東京神田の中国関係書籍を扱う書店の店主さんと話したんですけど、彼も中国専門の書籍を扱っているということで結構批判されるそうです。お前はスパイか、みたいなことを言われると。もし、これがフランス専門書店だったら誰か批判しますか、誰かスパイって言いますかと。中国モノを

扱っているだけでなぜ批判されなきゃいけないのか、僕はどうしても納得できない。

砂山 それはよく分かります。私のところは日本で唯一の現代中国学部ですからね。学部名に中国をつけているのは、七〇〇以上ある日本の大学のなかでうちだけです。

竹内 すごい。

砂山 だからきつと中国の傀儡学部なのかとか思っている人もいるでしょうね。やはりそれだけ日本で中国のことをやっているというのには、なかなか緊張を強いられる部分があります。だからこそ、相互理解のために中国人と率直に対話できる人材を育成しなきゃいけないと思っています。

◆これから先のこと

編集部 これから先の制作について何かご予定がありますか。

竹内 今後は最初にお話しした『長江』の続編を作ります。『長江』が二〇一一

年にNHKで放送されてからちょうど十年経ったので、自分の中で十年の区切りのために、今年の上半年は『長江』をメインに作ります。もう一回チベット高原から上海に至る六三〇〇キロを横断しようと思っっています。

編集部 ぜひ作っていただきたいです。もう一つですが、いつか竹内監督が中国側のどこかのメディアでインタビューされた際に、「もし我々が相手国のネガティブなことばかり見ていたら、この世界はもうおしまいになってしまふ」とおっしゃっていました。私はこの言葉は簡単ですけど、なかなか意味深長だと思います。なぜそう思われたのでしょうか。竹内 現在、ネット上では日本も中国も同じで、お互いのネガティブな情報が多いです。中国に住む日本人からすると、納得がいけないことが多いです。一言でいえば、よい気持ちになれない。どちらが言っていることも真実ではない、でたらしめなことはかりですね。しかし、残念なことは、やはりネガティブな情報が人に注目されやすいです。それらはでたら



『長江一天と地の大紀行』(2011)

悠久の大河・長江6300kmを「天」と「地」二つの視点で旅をするドキュメンタリー。源流から下流まで、長江流域の人々の暮らしや考え方の変化にふれながら中国を切り取った作品。この撮影が竹内の中国移住のきっかけとなった。

めですが、一定の影響を持つことは否定できない。僕は我々のレンズを通して、なるべく中国の真実を故郷の日本に伝えたい。ただし、ここでいう真実は主観的な真実です。真実とは多面的ですから、私一人が見た主観的な真実に過ぎません。少なくとも私一人にとつての真実であることは間違いありません。

編集部 竹内監督の出発点がよく理解できました。竹内監督が中国に移られたのは二〇一三年で、「爆買い」ブームの始まりが二〇一四年です。中国人訪日観光客が飛躍的に増加し、日本に一度来たことのある人口が増えてきた中国で、二〇一三年当時の中国人の日本に対する興味や関心、志向などがその後変わってきたなどということを感じられることはあります。

竹内 日本に来たことがある人に関しては、よりマニアックになっている人が増えました。最初は富士山とか、寿司とか、空手とかいわゆる「ザ・日本」だったんですけど。今はどんどん細分化されて、日本のこういうアイドルグループの

こういう人が好きとか、こういうドラマのこういうシーンが好きとか、僕でも全然ついていけないようなマニアックな状況になりました。二〇一九年までですけど、日本のアイドルやタレントがどんどん中国に来てライブをやったりするようになり、僕も乃木坂46と一緒に番組を作ったりとか、いろいろやったこともあります。とにかく日本のエンタメ文化がかなり入ってきて、日本人より詳しくいろいろマニアックになりましたが、コロナによってその種の交流がすべて止まりました。一方で中国のエンタメ文化がどんどん発展して、この一、二年でみな日本のエンタメに興味がなくなりました。それぐらい変化が速いです。中国産のアニメ、国産のアイドル、国産の俳優、国産の映画、みなそっちにいます。

砂山 昨日のネットで、中国国内で日本批判がまた強まっていて、乃木坂46が日露戦争、乃木希典との関連で批判されているというニュースを見ました。やはりコロナで交流が止まると、そういう傾向もまた伸びてくるということなのでしょう



うか。

竹内 そうですね。交流がないとどうしても内向きになってしまいます。だから人的交流は本当に大事だと思います。

砂山 最後にお聞きします。今後の予定として『長江』続編を撮影されるようですが、もつと長期的なご計画、あるいは大きな目標、夢とありますか。

竹内 大きな目標とかないですね。これまで結構本気でギリギリのところを歩いてきたので、綱渡り状態なんです。だから十年後にまだ僕がこの場でやっている保証など全くありません。何か表現をミスって完全に封殺されるリスクを常に背負って僕はやっている。ちょっと格好よく言いつぎかもしれないですけど、十年後なんか考えられるほど甘くないので、もういつこの世界で生きていけないなつてもいいぐらいの覚悟をしてやっています。なので、十年後など考えたことないです。日中関係ってそれぐらい微妙な中でずっと綱渡りしているから。これがフランスとかだったらいんですけどね。日中関係ってそれぐらい難しいか

ら、十年後なんか全く考えられません。砂山 厳しい条件の中でお仕事を続けてこられたということですね。それに負わず、今後さらなるご活躍を期待したいと思います。オンラインで長時間お付き合いくださいまして、ありがとうございます。

(二〇二二年八月二七日オンライン実施)